

# 「熊本地震災害ボランティア」に参加して

営業部営業課 堀田 朋男

## 【まえがき】

2011年3月11日の東日本大震災では、東京で震度5強を経験した。直接の被害は幸いにもなかったが、生活物資が手に入らない、ガソリンがない、放射能で浄水場が汚染されたなど、通常の生活を送ることは想像もできない時期を過ごした。

熊本県で被災された方々の一助となること、近い将来発生が懸念されている南海地震への備えを学ぶために今回の災害ボランティア活動に参加することを決意した。



1 階研修室で決意表明

## 【日程】

### 1 日目 6月4日(日)

本社(9:00 発) → 八幡浜港(13:00 発)  
→ 別府港(15:55 着) → (九州自動車道で移動)  
→ ホテル

### 2 日目 6月5日(月)

ホテル(7:00 発)  
→ 井関熊本製作所(ボランティア登録)  
→ 益城町総合体育館(ボランティア活動)  
(10:00~15:30) → 井関熊本製作所(終了報告)  
→ ホテル

### 3 日目 6月6日(火)

ホテル(7:30 発) → 熊本城被害状況視察(9:20)  
→ 益城町役場(10:40)  
→ 地震被害状況視察(移動の車内から視察)  
→ 別府港(16:45 発) → 八幡浜港(19:30 着)  
→ 本社(22:10 着)

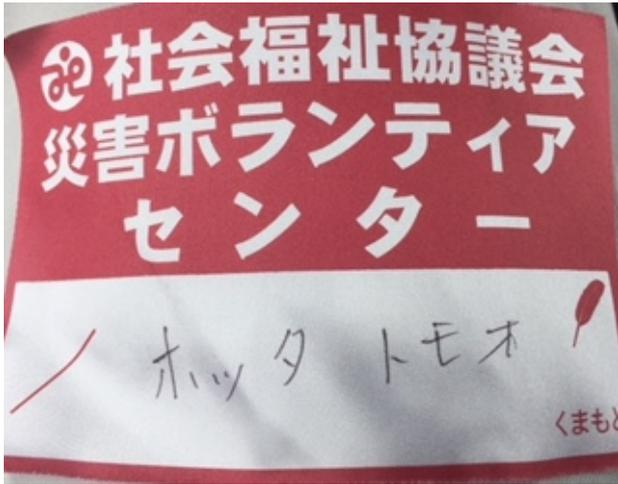
## 【1 日目】

今回の熊本災害ボランティア・視察団は総勢18名で、5台の車に分乗して現地へ向かった。出発前、本社にて我々のために壮行会があり、参加者全員無事に帰ってくることを誓った。

九州の別府港に到着するとそこかしこにビニールシートが被さった家屋を見ることができた。大分県も地震により被害を受けていることを知った。南海地震が起きた際に広範囲が被害を受けることが容易に想像できる。熊本自動車道を1時間強走行し、久留米ニュープラザホテルに到着した。本社から実に8時間以上の移動であったが、翌日のボランティア活動に奮っていたためか、疲れは感じなかった。

## 【2 日目】

ボランティアセンターの設営されている、井関熊本製作所に到着すると、受け付け開始直後にもかかわらず「本日の受付は終了しました」という看板が立てかけてあった。取り仕切る行政側の混乱により、ボランティアを十分に受け入れることができないようである。



警戒されぬよう、活動中は必ず付けるよう指示があった

益城町総合体育館は、ピーク時には 1600 名もの避難者が生活していた。現在も 780 人が避難している。益城町総合体育館に着いてまず驚いたことは、駐車場がすべてペットボトル等何らかのもので場所取りがされていることであった。車で寝泊まりしている方や、場内に避難されている方にとっては駐車スペースの確保が死活問題になっているようであった。

体育館内では我々を含めて 100 名近くのボランティアが活動していた。与えられた作業は館内 4 カ所のトイレ清掃および廊下等のモップがけ、館外のゴミ拾い等であった。避難所等集団生活で絶対に避けなければならないことは、高齢者が多いため、感染症を蔓延させないことである。トイレは感染症の発生源になることが多いため、毎日しっかりと清掃し、清潔を保つことが大切である。



感染症が蔓延しないように次亜塩素酸で念入りに清掃

活動中に避難者の方と挨拶をする機会が多かった。大変な思いをされているのに、「ご苦労様です」と声をかけていただき、相手を思いやる気持ちにとっても感動した。どのような状況でも、相手の立場に立って行動ができる、このことはとても素晴らしく、また決して忘れてはいけないことであると感じた。

避難所についての所感を述べる。洗面道具や子ども用おむつ・寝具などの生活必需品については、数は限られるが手に入れることができるようであった。子育て広場のような場所もあり、小さい子どもが遊ぶスペースも設けられていた。シャワーを浴びることもでき、設備が整っている印象を受けた。

### 【3 日目】

まずは熊本城視察へ向かった。実際に見る熊本城は想像以上の被害で、大部分が立ち入り禁止となっていた。熊本城公園二の丸広場から熊本城を望むことができるのみであった。天守閣の瓦とシャチホコは落ちてなくなり、城壁は崩れ、戌亥櫓は 1 カ所で辛うじて支えられている様子が遠目からも確認できた。観光客はまばらで、土産店は閑散としていた。



熊本城へは立ち入り禁止



戌亥櫓は隅の石積みで支えられている



無残に崩れた城壁

熊本城を視察後、益城町役場へ義援金を届けに伺った。前日の活動で訪れた総合体育館の近くが役場で、役場自体も被害が大きく、業務は仮庁舎で行われていた。これではボランティアに十分な指示ができないであろう。



益城町役場は復旧作業中であった



駐車場は波打ち、歩くのも危険な状態

フェリーの時間が迫っていたため、車窓から被害状況を視察した。役場を出発してすぐに全壊・半壊の家屋が広域に見受けられた。橋桁のずれた橋梁や波打つ道路、傾いた電柱など、地震前の風景が想像できないほど悲惨な状況であった。



傾いたり、1階部分が潰れた家が見受けられた

### 【あしがき】

本来指揮をすべき行政が被災するとボランティアの受け入れさえままならない状況になることを知った。高知県の状況はどうだろうか。行政が機能不全に陥った場合どのように行動すべきかといった視点は今までなかったように感じる。どのような状況でも考えて自主的に行動できるよう、日頃から備えなければならぬ。

終わりに、このような機会を与えていただいた会社に感謝するとともに、このたびの震災で被災された方々にお見舞い申し上げ、被災地の一日でも早い復興を心よりお祈りいたします。

# 「熊本地震災害ボランティア」に参加して

設計一部都市計画課 横山 成郎

## 1. はじめに

6月6日（月）8時30分から15時30分まで、熊本県上益城郡益城町で災害ボランティア活動を行った。私は、東日本大震災後に2回岩手県南三陸町でボランティア活動を行った経験があり、ボランティアを要望された被災した方々との交流やボランティア同士の交流を通じて、地域コミュニティと社会奉仕活動の重要性を実感した。

今回は、若い社員にもボランティア活動することで、私と同じように実感してもらいたいと思うとともに、避難所運営においてなぜ東日本大震災の教訓が活かされなかったかを検証したいと思って参加したものであり、その内容を報告する。

## 2. 災害ボランティアセンターでの疑問と教訓

災害ボランティアセンターに8時30分到着した。その入り口に、「本日のボランティア、受付終了しました」の紙を持って立っている人がいる。

「団体申込みしている」と言って入れてもらった。早くも、この時点で疑問を感じた。テント下の黒板には、「本日一般の受付は120人で終了です」と書かれてある。また、瓦礫等災害ゴミの収集は本日予定していない、ということ。たぶん15人社員全員その活動を想定していたと思う。



益城町災害ボランティアセンター

しかし、帰ってきてレポート作成という時に改めて熊本県社会福祉協議会のHPを見て自分自身活動した教訓が活かせていないことを反省した。

そこには、「ご参加の際は、各災害ボランティアセンター・生活復興支援ボランティアセンターの情報発信サイトの最新情報をご覧ください。」と書いてあった。まして、全国からの受付は、熊本市と西原村と御船町、益城町、の4市町村だけだった。

そして、益城町社会福祉協議会のHPを見ると、6月5日には「瓦礫の集積場所が受け入れをしていないため、活動できるニーズが限られており、150名程度のボランティアさんが必要となる見込みで、状況によっては受付締切を早める可能性があります」というメッセージ、そして6日の当日には「早朝から多くのボランティアさんがおいでになられておりまして8:25をもちまして、受付を締め切らせていただきました。現在、センターに向かわれている方には、大変申し訳ありませんが、ご理解をよろしく申し上げます」というメッセージ、が書かれてあった。

災害から命を守るには、情報を迅速に収集して的確に判断することが求められてことは承知していた。そして、東北でのボランティア活動においても、多くのボランティアセンターがあるが、それぞれで運営方法が異なるので、事前に情報を収集して、一般受付していないセンターもあることは、私自身の活動で知っていたはずだった。

常に、最新の情報収集を意識して、業務にも携わることが重要であることが教訓となった。

## 3. 収容避難所での疑問と教訓

ボランティアセンターで受付、益城町総合体育館へ行き、そこでボランティア活動することとなった。着いてまず、YMCAのビブスを着た職員らしき人から、今日の作業について説明を聞いた。活動内容は、屋内外のトイレ清掃など施設の清掃活動であった。直ぐに、疑問を感じた。なぜ、避難者が日々交替で清掃する体制ができていないの

か？地震直後は、1400人ぐらいいた避難者は700人ぐらいには減っているということ。周りを見ると、昼間この避難所にいる人は限られているから、やむを得ないか、と自分に納得させた。



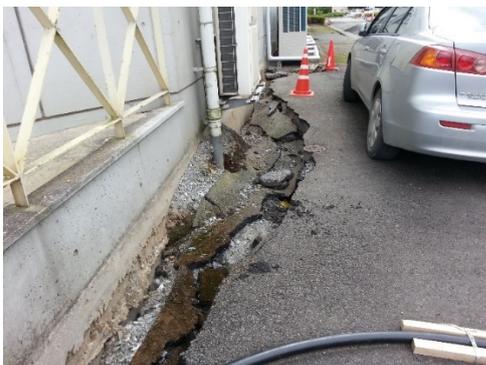
仮設トイレの清掃活動

トイレの後は、シャワー室の清掃を行った。トイレもシャワー室も十分に清潔な状態であると感じたが、黙々指示されたとおりに活動した。



シャワー室の清掃活動

昼休憩となり、施設周囲の被災状況と避難所機能について、少しの時間視察した。施設周囲は、液状化現象で、舗装はうねり、マンホールは飛び出て、施設と地盤は縁が切れ、周囲は30～50cmは沈下している状況であった。



沈下した周辺地盤

また、明らかに液状化と思われる、砂の噴出を確認した。隣接して河川があり、地形的にも昔は河川敷であったことが予想された。



砂の噴出跡

そして、避難所の機能であるが、その充実さには驚いた。トイレとシャワー、そして洗濯機、乾燥機、アイスボックス、体育館内にはカーテンで間仕切りされた畳敷きの上に段ボールベッドを置いた生活空間と空調完備していた。また、当然健康のケア等赤十字、理髪、マッサージ等多様なボランティア等による運営が充実していた。

収集した情報によると、他の小学校等の避難所では、避難者がその運営に関わって、それぞれが役割分担して助け合っているが、総合体育館は切り切った運営が見られる、ということであった。

体育館等の収容避難所は、仮設住宅に転居するまでの間、住民主体で地域コミュニティを活かした生活の場を築くことが重要なのである。確かに、行政の対応が遅れていて仮設住宅の整備に時間を要していることが要因の一つである。しかし、行政に頼らない備えが重要であることが理解されていないことに復興への不安を感じた。

我が高知市では、最大クラスの南海トラフ地震が発生すると9万人が避難者となることが想定されており、避難所の確保と速やかな運営の体制づくりが喫緊の課題となっている。この、命をつなぐ対策には、地域の自主防災組織が要となって行政に頼らない体制の充実に向け備え始めている。

熊本地震災害対応をしっかりと教訓として意識し、改めて減災対策の継続と向上の一役を担うことを決意したものであった。以上

# 熊本レポート

設計一部都市計画課 吉田 直起

## 1. はじめに

6月5日から7日まで、熊本県益城町へと出かけた。私が生まれた年の1995年、1月17日兵庫県南部で阪神・淡路大震災が起きた。また、2011年3月11日東北地方でマグニチュード9.0の東日本大震災が起きた。東日本大震災の時は、高校生であった。家に帰宅すると、テレビ中継で体験したことのない津波、被災状況を目の当たりにしたことが今でも頭の片隅にあった。しかし、実際に現地にはいけていない。今回会社からボランティアで、被災した現場に行くという話が朝礼で飛び込んできた。被災状況がどうなっているのか、新聞でしか見たことがなかった私は、実際に足を運んで、自分の目で被災状況を確認したいという思いから、ボランティアに参加した。

## 2. 熊本県益城町を目の当たりにして

宿泊ホテルから車で走らせて、1時間30分。益城町が見えてきた。高速道路からは、瓦が落ちた痕跡が分かるブルーシートが被されていた。



高速道路からの写真

高速道路から降りると、また違う景色となる。左右見てもそこら中に、倒壊した建物があった。被害が酷い建物には、色別で「要注意宅地」と書かれてある。また注意書きで「間知ブロックにひび割れがあります」と細かく記載しており、危険度が分かる表記となっていた。

## 3. 熊本県益城町の状況等を見て

実際に被災等の影響で倒壊した建物を見たことがなかった私は、新聞やニュースで事前に見ることにした。しかし、実際に目の当たりにすると、そこは人が暮らしていける環境ではないとすぐ思った。中には健全な状態で残っている建物もあるが、そんな建物は少ない。新聞やニュースで見ると現地の方がスケールの大きさを肌で感じられた。



住める環境ではない

## 4. ボランティア活動

私達は、益城町総合体育館でボランティア活動を行った。体力に自信があるという理由で西村（研）、島村、そして私が選出された。ボランティアのリーダーになってく

れた青木さんを筆頭にボランティアを開始。まずは、館内を案内してくれた。集団生活を拒んでいる人の中には、車の中で生活をしたりする人もいた。

次に施設内のターミナルで過ごされている方からの要望で掃除を開始。窓際に虫が溜まり、そこに死骸等が蓄積したのが原因で見た目が良くないということである。



窓際の掃除状況

横すべり出し窓を掃除した。青木さんからターミナル内の方が非常に喜んでいたという話を聞いて達成感があり、参加して良かったと思った。

## 5. 熊本城を見学して

熊本城の近くのパーキングエリアで駐車。そこから、歩いて正門へ。熊本城を囲っている塀が壊れている状態を目の当たりして、非常に残念だった。



熊本城の石垣

次に熊本天守館が見える広場へと向かった。緑の柵が張られていて、その先には行くことはできなかった。しかし、遠くから見る熊本城は、地震を経験したにもかかわらず立派に建っている。すごいと感じた。



熊本城天守閣



熊本城二の丸広場

## 6. おわりに

今回のボランティアでは、益城町総合体育館に避難している方が気持ち良く生活できるように周辺の美化を行った。私は、被災している瓦礫等の撤去をするなど、実際に被災した現地で活動したいと思っていた。美化等の掃除も大事だが、瓦礫がそのままの状態、撤去できていない宅地、民家を目の当たりにし、早く撤去してあげたいという気持ちがあった。撤去作業をすることで、も

っと感じられることが多いと思うからである。

高知県は、今後地震が起きるという確率が非常に高い。30年のうちに発生する確率が73%という数字は、今起きてもおかしくない状態。地震が起きた際の準備が疎かになっていた私は、それを見直す良い機会となった。

# 熊本ボランティア

2016.06.05～07

設計一部 河川砂防課 島村圭太

## 1. はじめに

30年以内に震度6強の巨大地震の発生確率が73%と予測している中で、実際の地震による被災状況を自分の目で確かめたくてこのボランティアに参加した。

2泊3日の熊本ボランティアは、被災時の対応に関する貴重な経験となった。

## 2. 避難所の状況

避難場所では、普段目にする事のない避難者の生活している部屋を見学した。将来自分の身に起こるであろう風景を目の当たりにしたときは、あまりの衝撃に言葉が出ず鳥肌が立つほどであった。ピークは約1600人で、現在でも約700人が生活されており、地震の恐ろしさを改めて知らされた。

## 3. ボランティア活動

今回のボランティアは、主に館内掃除や家具等の運搬を行った。自分たち以外にも多くのボランティア参加者がおり、一致団結して復興に協力している状況がとても素晴らしいと感じた。(写真4)

## 4. 被災地調査

車での移動中に目に入ってくる道路の亀裂や家屋の倒壊は、想像を遙かに超える規模でとても恐ろしかった。特に木造の建築物が多く倒壊している印象を受けると同時に、新築物件は大きな被害を受けている印象はなかった。(写真2・3)

最終日は熊本城で被災状況の見学を行った後、益城町役場へ義援金を渡しに訪問した。

熊本城は、城の武者返しが崩壊したり、壁面が倒壊していた。立派な歴史的建造物も崩壊は免れない。



大宮大神宮倒壊状況(写真1)



家屋被災状況1(写真2)



家屋被災状況2(写真3)



ボランティア活動風景(写真4)

## 5. 終わりに

今回のボランティアは今後の為の良い勉強をさせて頂いた。ボランティア作業中に被災者の方からお礼を言って頂いた際はとても気持ちよく、もっと支援したいと思った。

今後は南海地震に向けて自分で出来る対策の実施，周辺の避難施設や非常時の連絡方法の確認等，少しでも被害を軽減出来るように，日々の生活で意識していきたい。

# 平成 28 年熊本地震ボランティア活動

設計 1 部 河川砂防課 小島心平

## 1. はじめに

いずれ高知県も甚大な被害を受けるであろう巨大地震。プレート型と内陸直下型では被災形態が違うが、被災地を実際に見ることでなにか得られるものがあるはず。そう思いボランティアに参加した。

## 2. 九州へ

6月5日。会社に8時集合、8時40分より壮行式、9時出発。高知自動車道、松山自動車道、八幡浜港、別府港、大分自動車道を經由して宿泊地である久留米市へ向かった。所要時間は8時間程度。

道中、大分自動車道では舗装の剥ぎ取りをしている区間があった。一連の地震の震源地の近くにあったため地震の影響かと思い、後で調べてみるとその通りであった。

ただ、今回高速道路で損傷が見られたのはその1件とボランティアの日に通過した益城熊本空港IC付近での2箇所だけだった。

## 3. ボランティア

特別にホテルの朝食を6時半頃に取りらせてもらい、7時にホテルを出発した。

今回のボランティアは益城町での活動となる。久留米市からは高速道路で1時間程度の移動であった。意外なことに目立った損傷も見られず、スムーズに移動できた。

目に付いたのは熊本ICでの渋滞であった。待機列は本線ぎりぎりまで伸びており、通勤時間帯とはいえ尋常には見えなかった。地震により住居が損壊したか、余震を避けてなどの理由で遠方へ一時的に居を移した人が多くいるのだろう。

ボランティアセンターは民間業者所有のグラウンドに設置されており、各ボランティア活動の説明を行うレクリエーション施設や、水などの配給を行うテントが張ってあった。見ると駐車場の舗装は砂による汚れこそあれひび割れがない。グ

ラウンドと駐車場の境には真新しい防球ネット。被災後ボランティアセンターとして改修したらしい。



近隣にも築間もない倉庫がみられ、物資集積拠点かと思われたが一般業者の倉庫の様で、中には新品の耕作機械が並べられていた。

ボランティアセンターで必要な書類に記入した後、名札を左肩へ貼り付け、指示された避難所へ向かった。場所は益城町総合体育館。現在でも約700人が避難生活を続けているそうだ。

避難所へ入ってまず感じたのは、意外にも賑やかさであった。ロビーには避難者、ボランティアが多数おり、テレビを見ながら笑っている様子も見られた。住民に対する窓口もある。

病院や売店、炊き出し、散髪、役場など普段は方々に散らばっている機能が1箇所に集中し、住民が共同生活するとなればこの賑やかさにも納得がいく。

住居や財産をなくした痛みは察する限りであるが、少なくともネガティブな雰囲気には支配されていないようで安心した。

ボランティアとして与えられた仕事はトイレ掃除であった。地味な仕事ではあるが、できることを精一杯やるだけである。

その日は3時頃にボランティアを切り上げ、ボランティアセンターに報告を行った後、久留米市まで戻ることになった。

#### 4. 被災地見学、帰省

ボランティアを終えた次の日は熊本城を見学し、益城町へ義捐金の手渡し、後は出来るだけ震災の被害が見られるように下道を通して各自別府のフェリー乗り場で集合という流れだった。今回はボランティアが主目的だったため見学計画などは用意しておらず、見た上での所感しか得られなかった。

高速道路を熊本ICで降り、市街を縫うようにして熊本城へ向かった。ブロック積擁壁、自動車展示場のガラス、ビルの外壁、ピロティー構造だった1階。あらゆる構造物が破壊されており、50日ほど経った現在でも巨大地震の爪痕がまざまざと残されていた。ただ店舗の多くは営業しており、復興に向け着々と進んでいることが感じられた。

熊本城に関してはテレビで見たとおりで、ほとんど近寄れなかった。こういった町のシンボル、史跡が崩壊するのは住民の精神に少なからず影響すると思う。いずれまた蘇った頃に訪れたい。



特に印象に残ったのは熊本城から益城町への移動であった。

距離にして10km程度なのだが、明らかに被害が大きくなってきている。

熊本市内の店舗は既存の建物を使い営業を行っていた。益城町で営業しているのは震災後新たに建てられた建物だけである。家屋は軒並み立入禁止を知らせる赤い紙が貼られていた。

ボランティアが益城町と知らされた時、正直人手は足りているのではないかと、目立っている箇所に目がついたのではないのかと、思っていたが先入観であった。もっと広い視野に立ち、地域全体を比較するなどして被害を知るべきであったと反省している。

益城町で義捐金を手渡した後、阿蘇群の道を伝って大分まで戻った。隣町まで移動するとすぐに健全な建物が見られ、町並みも普段と変わらないようになっていた。各メディアが益城町ばかり映すのも頷ける。広く被災地を見られたのは良い経験になった。

16時30分のフェリーに乗り、高知へ着いたのは結局22時くらいであった。

全員無事に帰着し、解散した。

現在、私は震災が起きた時に必要な機能を配置する計画を策定する業務に従事している。今回の経験を活かさない手はない。

積極的に意見し、高知県の被害を少しでも低減できるよう行動していきたい。

-以上-

# 熊本ボランティアに参加して

設計1部 河川砂防課 生田 万祐子

## 1. はじめに

6月5日から7日にかけて、熊本地震で特に甚大な被害を受けた益城町において、会社の支援のもとボランティア活動に参加した。

災害ボランティアは初めての経験で不安も大きかったが、地震災害についての業務に何度か携わる機会があり、強い関心を持っていたため参加を決めた。



ボランティア班集合写真(他2名撮影)

## 2. 日程

- 1日目：高知から八幡浜～別府フェリーを  
経由して久留米のホテルへ移動
- 2日目：益城町にてボランティア活動
- 3日目：熊本城見学・益城町へ義捐金を渡  
した後、視察も兼ねつつ帰路へ

## 3. 1日目 高知から久留米のホテルへ

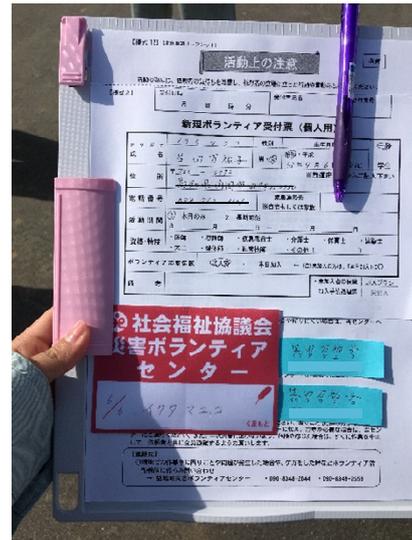
社内にて壮行会を行い、目的地である久留米のホテルへ向け総勢18名(内女性4名)で出発した。休日にもかかわらず社員の方が見送りにきてくれた。八幡浜からフェリーに乗って別府へ渡り、そこから久留米のホテルへ移動した。

1日目は移動のみで、明日の活動に備えて早めに就寝した。

## 4. 2日目 益城町にてボランティア活動

ボランティア班と調査班に分かれ、朝7時にホテルから熊本に出発した。我々ボランティア班は、益城町のボランティアセンターへ向かった。熊本に入ると、屋根にブルーシートを張っている家屋が目立ちはじめ、被災地に足を踏み入れたことを実感した。

8時30分頃にセンターへ着いたときには、「本日のボランティア募集は締切りました」と書かれたフリップを掲げた職員が既に入り口に立っていた。我々は事前に団体申込をしていたため、駐車場へ案内された後、ボランティアの受付を無事することができた。



ボランティア受付票

今回のボランティアの内容は、避難所のトイレ掃除等が割り当てられた。活動場所であるメインの避難所の益城町総合体育館へ移動する道中、益城町の惨状を自分の目で直に見ることになった。それは思っていた以上に凄まじいものであった。

避難所では未だ700人近くの避難者の方々が生活しているとのことである。しかし平日ということもあり、仕事や学校へ行っている

方が多く、見かけるのは高齢者の方がほとんどだった。建物周辺では、アスファルトが波打ち、地盤沈下により建物と地面が離れ、まるで浮いているかのような状態だった。地震の圧倒的エネルギーをまざまざと見せつけられた。このような状態は、不安が払拭されないため避難生活は精神的な疲労が大きいものと感じた。



体育館周辺の波打ったアスファルト



地盤沈下の応急復旧状況

避難所で説明を受けた後、窓掃除・屋内トイレ掃除・仮設トイレ掃除の班に分かれて活動を開始した。私を含め女性4人は、屋内の女性用トイレと多目的トイレを担当した。

作業は、ジア塩素にて便器から床に至るまでの滅菌作業を主とした、念入りなトイレ掃除である。想像以上に重労働ではあったが、トイレに来る避難住民の方にお礼を言われ、ますます磨きに力が入った。

午前中にトイレ掃除を終わらせ、1時間の休憩をとり、フロア内のモップ掛けやゴミ捨

て、施設周辺のゴミ拾いなどを行った。

ボランティア活動は15時頃には終了し、一旦センターに帰還した後ホテルへ戻った。活動時間は短かったが、疲労感は大きかった。



トイレ掃除の様子

## 5. 熊本城見学・義捐金を益城町へ

この日は7時30分にホテルをチェックアウトし、被災状況を確認するため熊本城へ向かった。熊本の街は、やはり高知に比べると道も広く交通量も多い。

熊本城は初めて訪れたが、最初の訪問がこのような形になるとは思いませんでした。熊本城はあちこち石垣が崩れ、立ち入り禁止となっていた。外から見ても、とても大きく立派な城である。次に訪問する時は、復旧された本来の熊本城をぜひ拝みたいものである。



熊本城被災状況①



熊本城被災状況②

その後、義捐金を届けるために、再び益城町を訪れた。今回は熊本城から一般道を通り、役所を目指した。益城町に近づくにつれ、倒れかかった建物や、がれきが目についた。



潰れたり傾いた建物の状況



がれきが山積みになっている

被害を受けた益城町の庁舎は、プレハブの仮庁舎や公民館で業務を行っている状態であ

る。そこにはたくさんの方々がひっきりなしに訪れていた。行政の重要性和役割はやはり大きいと感じた。我々の義捐金で少しでも復興に助力できれば幸いである。



義捐金を託す

予定された全工程を終え、益城町を後にした。その後は熊本の一般道を経由して別府からのフェリーで八幡浜に渡って、22時過ぎに会社まで全員無事に帰ってくることができた。

## 6. まとめ

今回一度も余震にも遭わず、トラブルもなく終わったことに感謝している。

今まで何度もメディアや報告会等で、熊本の状況を目にしてきた。しかし今まではあくまでも切り取られた画面上での認識であり、自分の目で見るという事の重要性を思い知った。ほんの一部を見て、悲惨さをわかったつもりになっていた。多くの家屋が被災し、まだまだ復興に時間がかかることは、言葉では何度も聞いてきた。眼前に広がる、崩れた家屋、積み上がったがれき、倒れかかった電柱、あちこち補修されたアスファルト。言葉では言い表せない気持ちになった。この気持ちこそが、価値があるのだろう。

高知にもいずれ南海トラフ巨大地震がくる。東日本大震災では、津波の怖さを、私を含め日本中の人々が改めて思い知らされるものだった。高知県は山と海に囲まれ、津波被

害が甚大であり、多くの山間部が孤立することは間違いない。

今回訪れた避難所では、避難者とボランティアとの関係には大きな立場の隔たりがあったように感じた。今回の地震では、限定された場所での被害が大きかったことで、被災状況にも個々で大きな差が生じた。外部からのボランティア団体が中心になって活動しており、避難者自身の積極的な運営等の活動は見られなかった。運営側は、避難者に対してとてもデリケートに接していた。各個人スペースの仕切りは地震発生から2週間ほど過ぎたころにやっと設置し始めたこともあり、それだけストレスがかかっていたということだろう。ボランティアの需要はまだ多くある。しかし、ボランティア受け入れ側のキャパシティ不足と、我々のような一般のボランティア以外での専門的な職種の需要に対する人手不足が深刻であると感じた。

東日本大震災のボランティアにも参加したメンバーの話では、「東北では、津波により多くの犠牲者と、いくつもの町が根こそぎ無くなった。行政もまともに機能しないうえ被災者の数も圧倒的に多かったため、多くの方が自分でなんとかするしかない状況が長く続いていた。」

高知県は県全体で大きな被害が出るのが想定されており、コミュニティ力が最も重要になってくる。おそらく、熊本地震よりも東北に近い状態になるだろう。しかし今回熊本を訪れ現地の状況を見たことで、この問題を改めて認識することができた。そしてなにより、実際の「避難生活」の「空気」を感じることができた。

南海トラフ大地震では、行政の被害も大きいと思われるため、援助は期待できない。自分がいったい何ができて、その中で何をすべきかを自分で決断し行動する。そしてそれは自分勝手な行動であってはならない。同時に、自分に与えられた役割に従う力も必要で

ある。

## 7. 終わりに

この度は、熊本地震により亡くなられた方にお悔やみを申し上げますとともに、被災された多くの方々の一日も早い日常生活への復帰と、被災地の復興を心よりお祈りいたしております。

## 1. 熊本地震

熊本地震は、2016年4月14日以降に熊本県と大分県で相次いで発生している地震である。

4月14日21時26分、熊本県熊本地方を震央とする、震源の深さ11km、気象庁マグニチュード6.5の地震（前震）が発生し、熊本県益城町で震度7を観測した。その28時間後の4月16日1時25分には、同じく熊本県熊本地方を震央とする、震源の深さ12km、マグニチュード7.3、地震（本震）が発生し、熊本県西原村と益城町で震度7を観測した。さらに16日の本震以降、熊本県熊本地方の北東側に位置する熊本県阿蘇地方から大分県西部にかけて、および大分県中部（別府-万年山断層帯周辺）においても地震が相次ぎ、熊本地方と合わせて3地域で活発な地震活動がみられた。なお、この地震による死者は計41名となった。16日未明の地震後、避難者は最多で18万3882人に上った<sup>1)</sup>。

## 2. ボランティア活動

熊本地震災害ボランティア活動は、被災地の復旧・復興の手助けを通じ社員の人間力・団結力を高める。被災状況を調査し南海地震対策等今後の業務に役立てる。以上を目的とし、6月6日（月）、ボランティア班15名にて、熊本県上益城郡益城町でボランティア活動を行った。当日朝、益城町災害ボランティアセンターで割振りが行われ、われわれ15名は、益城町で1番多くの避難者が生活する総合体育館で清掃活動を行うことになった。午前中は、屋内のトイレ、屋外の仮設トイレ、シャワー施設および窓の清掃を行った。午後からは、各フロアの掃除および屋外のゴミ拾いを行った。その様子を写真1から写真3に示す。誰にでもできる簡単な作業ではあったが、被災者の役に立て、有意義な時間を過ごすことができた。



写真1 屋内トイレの清掃の様子1



写真2 屋内トイレの清掃の様子2



写真3 仮設トイレの清掃の様子

### 3. 被害状況の調査

6月7日(火)、ボランティア班にて熊本城を視察した。熊本城は、安土桃山時代から江戸時代に熊本市中心部に築かれた城である。西南戦争の直前に大小天守や御殿など本丸の建築群が焼失し、現在の天守は1960年の再建である。現存する宇土櫓などの櫓・城門・塀13棟は国の重要文化財に指定されている。また、城跡は「熊本城跡」として国の特別史跡に指定されている<sup>2)</sup>。

熊本地震により、石垣・櫓・天守閣に甚大な被害を受けた。現在、城の公開は中止され、閉鎖されている。復旧の目処は未だ立っていない。視察中に撮影した熊本城の被害状況を写真4から写真6に示す。

熊本城を視察後、義捐金を益城町役場に届け、役場付近の被災箇所を視察した。消防庁発表によ

ると、5月24日8時00分時点で、住宅の全壊が7,996棟、半壊が17,866棟、一部破損が73,035棟と確認されている。また公共建物の被害が248棟確認されている<sup>1)</sup>。益城町の家屋等の被害状況を写真7から写真10に示す。



写真6 熊本城の被害状況3



写真4 熊本城の被害状況1



写真7 益城町役場の被害状況



写真5 熊本城の被害状況2



写真8 益城町での家屋の被害状況1



写真 9 益城町での家屋の被害状況 2



写真 10 益城町での家屋の被害状況 3

### 3. 感想

避難所の居住スペースは白い布で覆われ、プライバシーが確保されていた。避難所は掃除が行き届いており、清潔に保たれていた。生活する上で、ストレスを溜めないように、また衛生面を考えても清潔な環境を保つことは非常に重要である。

非常時なので仕方がないのだが、掃除道具が十分に補充されていれば、もっと掃除しやすいと感じた。

避難所から仮設住宅への移動が順次行われていく。衣食住がとりあえず確保されたとはいえ、被災者には、これからもまだまだ不自由な生活が続く。今回のボランティア活動に参加して、間接的にはあるが、少しでも被災者の役に立てたことが嬉しかった。

また、映像や写真では、家屋等の被害状況を目にしていたが、実際に現地で自分の目で観るのでは印象が随分と違い、考えさせられることも多々あった。

益城町役場にも足を運んだが、建物は甚大な被害を受けていた。また、今回ボランティア活動を行った総合体育館周辺のアスファルトも激しく隆起していた。避難所に指定されていたが、地震による建物の損傷が激しく避難所として使用できなかった施設もある。

高知県でも近い将来、南海地震が起こる。避難所や役所など災害時の拠点となる施設の機能確保が真っ先に取り組むべき課題であると痛感した。また、倒壊した家屋を観て、家の耐震化の重要性を再認識した。旧基準で建てられた家屋においては特に耐震化の必要がある。

最後に、このような貴重な機会を与えて頂き、どうもありがとうございました。

#### [参考文献]

1) ウィキペディアフリー百科事典「熊本地震 (2016年)」

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%86%8A%E6%9C%AC%E5%9C%B0%E9%9C%87\\_\(2016%E5%B9%B4\)\\_t](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%86%8A%E6%9C%AC%E5%9C%B0%E9%9C%87_(2016%E5%B9%B4)_t)

2) ウィキペディアフリー百科事典「熊本城」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%86%8A%E6%9C%AC%E5%9F%8E>

# 熊本災害ボランティアに参加して

設計二部 橋梁構造課 大和田菊代

## 1. はじめに

2016年5月14日より発生した、熊本県に甚大な被害を出している熊本地震。連日の報道で被災地の現状を知り、出来ることはないかと考えていたところにボランティア団のお話がありました。体力にあまり自信がないので不安はありましたが参加を決意しました。

今回のボランティア団の参加者は15名で、一日目は移動、二日目にボランティア活動、三日目は視察を兼ねながらの帰路という工程です。

## 2. 益城町と避難施設でのボランティア

前日の宿泊地は隣県福岡県久留米市でした。ボランティア活動地の益城町までは九州自動車道を走り「益城熊本空港IC」で降ります。益城熊本空港IC付近は切土側である左側車線が通行止めになっていたが、舗装には大きな損傷は確認できなかったため、擁壁やのり面に損傷が起きているのではと思いました。

住宅や商店が建つ地域に差し掛かると、すぐ沿道に全壊した家屋が目に入ってきます。突然の非日常に息が詰まりました。テレビ報道などの映像で覚悟はしていたのですが、柱が傾いて今にも倒れそうな家や、重機などが作業した後なのか木材や家具や布団が瓦礫のように積み上がっている場所など、損傷の無い家屋を見つけるほうが困難な程の状況に恐怖しました。

ボランティア場所は避難施設となっている「益城町総合体育館」で、二階建ての大きな建物です。比較的新しい建物なのか、内部の見える箇所にはひび割れなどはなく、空調もきいているようでした。しかし外周は隆起が激しく、段差が高すぎて出入り口として使用できそうにない箇所も見受けられました。



シャンプーのボランティアのテントと隆起したままのアスファルト

ボランティアの形態は「災害ボランティアセンター」へ各場所から依頼がされており、登録されたボランティア人員を派遣するというものでした。この施設の管理団体は熊本YMCAで、ボランティアシールを追加したとても目立つスタッフゼッケンを配布されました。左腕には「災害ボランティアセンター」の氏名入りワッペンを張り付けます。はっきりと身分を識別できることは、現在も700名ほどが避難しており誰でも出入り出来てしまう施設において、避難者さんの不安を少しでも除けるのではと思いました。



配布されたゼッケンとワッペン

主な作業はトイレの清掃で、難しくない仕事でしたが数が多く、また利用される方も多いので案内手間取りました。大勢での集団生活ですのでインフルエンザ等の懸念もあり、館内の清掃や除菌には気をつけているようです。

### 3. 熊本城

ボランティア活動の翌日、熊本城の見学に向かいました。熊本城は、現在そのほとんどのエリアを進入禁止としており、天守はもちろん櫓などの建造物には近づくことが出来ません。二の丸広場から辛うじて、瓦が少し崩れてしまった黒い天守を望むことが出来ます。

熊本城は規模が大きく、崩れている石垣の量も膨大で復旧には時間がかかると思いますが、技術力を駆使して必ず復旧できると信じます。復活した姿を見るために将来訪れようと思います。

また、各所に黄色い帽子やヘルメットをかぶった方が座っており、危険エリアに進入者が居ないか、もしくは石垣の変状観察をされているスタッフではないかと思いました。これから厳しい天候になりますので体調管理に気をつけていただきたいです。



雪崩れるように崩れた石垣



熊本城天守



立ち入り禁止エリアマップ (熊本城公式 HP より)



崩れた石垣の傍に座るスタッフ

### 4. おわりに

今回初めて地震被災地に赴き、町や避難場所の状況を拝見しました。短い期間でしたので知ることが出来たのは一部ですが、肌で状況を感じられたことは大きな経験となりました。今後 30 年以内に 70 パーセント程度の確立で発生するとされる南海地震につながる仕事や、防災準備に生かせるのではと思います。

復興はまだ始まったばかりで、直接現地のお手伝いをするのは難しいですが、これからも何か力になれることはないか探していこうと思います。

# 熊本災害ボランティア

調査部調査測量課 岡村 和輝

## 1. はじめに

平成 28 年 6 月 5 日～6 月 7 日の 2 泊 3 日、熊本災害ボランティアに参加した。初めての災害ボランティアで不安もあったが、少しでも被災地の力になりたいと思い参加を決めた。

## 2. 日程、移動経路



## 3. 避難施設の様子

今回ボランティアをした場所は、熊本県益城町にある益城町総合体育館。この施設には最大約 1600 人の方が避難していた。今は約 780 人となっているが、お年寄りから子どもまで様々な方が生活していた。アリーナは 4 畳ほどのスペースで区切られていた。段ボールの上にマットを敷き、壁は布一枚だけ。ストレスがたまる生活だと思った。アリーナの他にサブアリーナや柔道場、廊下にも被災された多くの方が生活していた。外に一步出るとマンホールは浮き上がり、建物の周りは沈み、玄関前のアスファルトは波打つように破損していた。

## 4. ボランティア

今回のボランティアは掃除がメインだった。

午前は、外の仮設トイレとシャワー室の掃除をした。仮設トイレは 20 個ほどあった。外にあるトイレなので凄く汚れているだろうと思っていたが、以外に綺麗だった。シャワー室は、男性用 10 個、女性用 10 個で使用時間が決められていた。それほど汚れていなかったが、壁や床を一生懸命スポンジで掃除した。

午後は、施設内の掃除をした。避難している方に迷惑をかけないようにモップがけや雑巾で拭き掃除をした。最後に施設の周りのゴミ拾いをした。特に駐車場でタバコの吸い殻が多く目に付いた。

私たちの他にも、医療関係の方やマッサージ師の方や理容師の方など様々な方がボランティア活動をしていた。

## 5. 熊本県の状況

家の屋根にブルーシートがかけられ、一階がつぶれている家や傾いている家が多くあった。道路は、いたる所に亀裂が走りマンホールの多くは浮き上がり、道路沿いに瓦礫が積み上げられていて、車で通るのが怖かった。最終日に見学した熊本城は、石積みは大幅に崩れ、立ち入り禁止の所が多かった。

## 6. さいごに

多くの方が家をなくし避難所生活をしている現状を見て、改めてボランティア活動の大切さを身をもって知ることが出来た。熊本県で見て、聞いて、感じたことを今後來る南海地震にいかしていきたい。

## 熊本地震ボランティアに参加して

調査測量課 島内 司

### 1. はじめに

4月14日に熊本地震が発生して以来自分にできることがないかずっと考えていました。口で「早い復興を願います」というだけで何も行動しない人間にはなりたくなかったからです。そんなとき、会社でボランティアに行くという話を聞きこんなチャンスはないと思い参加を決めました。

### 2. 一日目 高知出発

6月5日の朝、会社に集まり出発式を行いました。

男性14名、女性4名の計18人のメンバーでの出発です。



出発式の準備

高知→八幡浜（フェリー）→別府→久留米と車で向かい計7時間30分の長旅で宿泊先の久留米へと移動しました。

### 3. 二日目 ボランティア

この日は実際にボランティアを行うために益城町に向かいました。その際に窓か

ら見える光景に私は愕然としました。屋根の瓦がはがれ落ちブルーシートで覆われている家、揺れで斜めに傾いている電柱など自分が今まで見たことない光景が目の前に広がっていました。



車からの景色

現場に到着してから実際に自分たちが行ったボランティアは掃除がメインで体力的にはそれほどきつくない作業でしたが、避難されている方を見ると胸が痛み、それと同時に高知で地震が起きたこと想像すると怖くて仕方なかったです。



仮設トイレの掃除



カーペットの掃除

#### 4. 三日目 熊本城視察 帰路

最終日は熊本城の被害状況を見に行きました。ニュースなどでかなり被害を受けているということは知っていましたが、実際に足を運ぶと壁が崩壊していたりしてほとんどの場所が立ち入り禁止になっており自分が想像していた以上にひどい状況でした。



柱一本でお城を支えている様子

帰りは行きと逆の経路で帰りながら被害状況を車の中から視察するため高速は使わず、下道で帰りました。

そこでも崩壊した家屋などが目に映りなんとも言えない気持ちになりました。



崩壊した家屋

#### 5. おわりに

私は今回初めて被災地に行きボランティア活動に参加しました。

そこで私が一番思ったことは地震だけでこんなに被害がでるのか、ということです。

高知県は熊本地震より激しい揺れと津波がくることがわかっています。激しい揺れに加え津波。高知県はいったいどうなってしまうのだろうと不安で仕方ありません。

私はこれからさらに強い気持ちで仕事に取り組み高知を守るために少しでも力になれるよう精進していきたいです。

最後にこのような機会をもうけていただいたことに感謝しています。

## 平成 28 年度熊本地震災害ボランティア

調査測量課 西村研了

### 〔はじめに〕

熊本地震災害ボランティアに 6 月 5 日～6 月 7 日にかけて 2 泊 3 日で参加した。5 年前の東日本大震災時には参加できなかった。今回は少しでも熊本復興に貢献したいという強い思いもあって参加させて頂いた。

### 〔一日目〕

一日目は移動日。8:00 に会社へ集合し出発等の準備を行い、8:40 より 1 階研修室にて災害ボランティア団壮行式が行われた。9:00 に 18 人が車 5 台に分乗し会社を出発。日曜日だったが多くの社員の方に見送ってもらった。高速道路とフェリーを利用し一路宿泊ホテルのある福岡県久留米市へ。17:00 に到着。その夜は翌日の災害ボランティアに万全を期するためにそのまま就寝。

### 〔二日目〕

二日目はボランティア班 15 人、建物の被害調査班 3 人に分かれて 7:00 にホテルを出発。8:10 に熊本県上益城郡益城町安永にある益城町社会福祉協議会災害ボランティアセンター（以下「ボランティアセンター」という。）に到着。その後、受付を済ませミーティングを行い今回ボランティア活動を行う益城町総合体育館へ。到着後、YMCA の責任者の方から活動上の注意事項等の説明を受け、グループに分かれ、午前中は屋内トイレ・仮設トイレの清掃、窓ふき、ダンボールの組み立作業等を行い、午後は各フロアの清掃、ゴミ拾い、物運び等の活動を行った。15:00 まで活動を行った後、ボランティアセンターに戻り活動内容を報告しボランティア活動終了。その夜はみんなで夕食。

### 〔三日目〕

三日目は 7:30 にホテルを出発。午前中は二班に分かれての工程。建物の被害調査班は現地調査。ボランティア班はまず熊本城へ視察。テレビ、新聞報道で熊本城の深刻な被害映像は見ていたが、目の当たりにしてみると甚大な被害を受けているのがわかる。天守閣等の屋根瓦や石垣が崩れ、建物も倒壊していた。南海大地震時の高知城が心配だ。その後、益城町へ義援金を届けた。その後、各々で被災箇所を視察しながら別府港に集合し高知に帰省した。

### 〔最後に〕

ボランティア活動を行った益城町総合体育館には、お年寄りから子供まで約 800 人の方が避難生活をされていた。ピーク時には約 1,600 人の方が避難生活をされていたと YMCA の方から聞いた。熊本県内では今でも約 10,000 人の方が避難生活され、まだ余震も続いている。高知県でも今後 30 年以内の発生確率が 70%程度されている南海トラフ地震。震度 6 弱以上の揺れ、最大高 34m の津波が襲い、高知県は甚大な被害が想定されている。行政も機能しないことも予想され、支援物資も届かないかもしれない。「備えあれば憂いなし」という表現がある。家具・家電の転倒防止、3 日分以上の水や食料の備蓄、耐震補強、避難場所の確認等できる事から少しずつ備えていくしかない。今回災害ボランティア団の一員として参加させてもらい本当に感謝です。

被災地の一日も早い復旧と、被災された皆様が平穏な日々を取り戻せるようお祈りいたします。

# 熊本地震災害ボランティア

調査測量課 田村 隆幸

## 1. はじめに

平成28年6月5日から6月7日までの三日間の日程で災害ボランティア活動15名、建物等の被害状況調査3名の計18名が参加した。瓦礫等の片付けや被害状況調査などを中心に活動を行った。

## 2. 日程

- ・ 6月5日(日)～6月7日(火)  
2泊3日
- ・ 1日目 午前9時会社出発  
久留米泊
- ・ 2日目 災害ボランティア  
建物調査
- ・ 3日目 熊本市内災害箇所視察  
帰省

## 3. 活動内容

- ・ 災害ボランティア
- ・ 建物等の被害状況調査

## 4. 活動場所

- ・ 熊本県上益城郡益城町  
総合体育館
- ・ 熊本県熊本市



(熊本県益城郡益城町 仮設トイレ)

## 5. 仮設トイレの掃除

熊本県上益城郡益城町の避難所には20余りの仮設トイレが設置されており、二日目の災害ボランティア活動では仮設トイレの掃除をした。

掃除では衛生管理を徹底した。取りかかる際にはアルコール除菌やエプロン、手袋をしたうえで掃除した。

利用者は地震発生以降、退去者もでており減少はしているが現在もたくさんの方が利用している。



(仮設シャワー室)



(仮設シャワー室 室内)

## 6. 仮設シャワー室の掃除

益城町の避難所には20基の仮設シャワー室が完備されており午前7時～午前10時、午後17時～午後21時までが利用時間である。利用時間外は使用できないよう鍵がかけられている。

仮設シャワー室は脱衣所がなく室内での脱衣になる。室内は比較的広くなっており、石鹸やシャンプーなど完備されておりたくさんの方が利用している。利用できる時間は一人15分程度であり、長時間利用すると時間内に利用できない方が出るからである。

仮設シャワー室は避難所に隣接しており、雨などの際には雨に濡れることなく利用できお年寄りや小さな子供には利用しやすい環境である。



(熊本城 崩れた石垣 ①)



(熊本城 崩れた石垣 ②)



(熊本城 崩れた石垣 ③)



(熊本城 落ちた瓦)

## 7. 熊本城の視察

熊本城は現在の熊本市中央区に築かれ安土桃山時代～江戸時代の城で別名「銀杏城」とよばれている。

広さは約 98 万 m<sup>2</sup>、周囲は約 5.3 km であり築 400 年である。

現存する城門・塀などは国の重要文化財に指定されている。

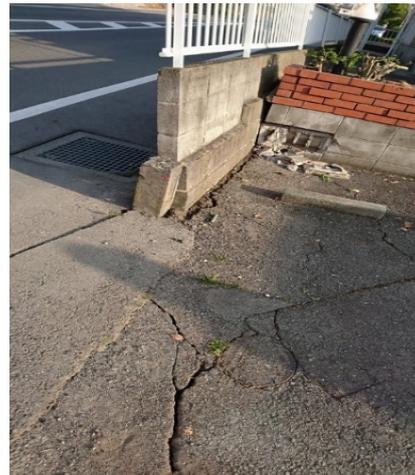
熊本地震によって重要文化財に指定されている櫓が倒壊し石垣が多くの場所で崩落していた。

現在は禁止区域になっている場所も数多く残っていた。

地震によって熊本城天守閣の瓦やその他の建築物の瓦も至るところで崩落していた。崩落した場所にはブルーシートがかけられていた。熊本県益城町や阿蘇には瓦が崩落している場所が複数みられた。



(益城町 役場)



(亀裂の入った道路)

## 8. 益城町

益城町役場は震度 7 の揺れを 2 回受け壁にひびが入るなどしており、現在は敷地内に新しくプレハブ庁舎を建設し業務を行っていた。

益城町では民家の倒壊や大きな亀裂が多くみられた。ボランティア活動場所である益城町総合体育館にも大きな亀裂や地盤沈下した場所が多くみられた。また、倒壊した民家の瓦礫撤去のためボランティアが至る場所で活動を行っていた。益城町では倒壊している民家や地盤沈下した場所が多くみられた。

## 9. おわりに

今回のボランティア活動で避難所の設備など実際に確認することができ今後の対策に生かしたいと思った。またボランティア活動を通して団結力を高めることができた。

熊本地震は 2 度の大きな揺れや余震の影響などがあり、益城町では民家の倒壊、地盤沈下などが発生しており今後の南海トラフ地震対策に活かすべく知恵を絞っていきたい。

# 「熊本災害ボランティア」に参加して

空間情報課 酒井寿彦

## 1. はじめに

私は、2011年の東日本大震災のときに「宮城県を元気にする高知応援隊」に参加して、炊き出し、民間ボランティア、現地視察等を行い、実際に現地をこの目で見て、被災地に触れ多くのことを学んだ。

2016年4月14日から断続的に発生した熊本地震において、会社からボランティア団を派遣する話が持ち上がり、少しでも被災地の力になることと、被災地に触れ、近い将来発生が予想されている南海大地震対策に役立てることを目的に「熊本災害ボランティア」に参加した。

活動は、災害ボランティア班(15名)と建物等の被害状況調査班(3名)に別れ、私はボランティア班で参加した。

日程は6月5日から7日にかけての3日間で、1日目は「久留米への移動」、2日目は「益城町で災害ボランティア」、3日目は「現地視察と帰高」であった。熊本県内の利用可能な宿泊施設はすべて満室のため、福岡県久留米市を拠点とし、今回は一番被害の大きかった益城町を中心に活動した。主な活動場所は下図のとおりである。



益城町で活動した場所

## 2. 久留米へ移動(1日目)

8時半から会社で壮行会があり、弘田団長の下、参加者18名が一致団結した。



壮行会の様子

社員の見送りのもと車5台に分かれ9時に会社を出発した。高速道路を利用し12時前に八幡浜フェリー乗り場に到着。横にある道の駅「みなつと」で昼食を取り13時のフェリーで出航。16時頃、別府に到着し高速道路で宿泊先の久留米のホテルへ移動。17時過ぎに到着し翌日ミーティングを終え、その日は各々夕食を取り就寝した。

## 3. 災害ボランティア(2日目)

朝7時にホテルを出て、コンビニで昼食のおにぎりりと水分補給のお茶を買い、約80km先の益城町ボランティアセンターに向け出発した。

8時半にボランティアセンターに到着すると、入口に「本日のボランティア受付終了」と張り紙があった。8時半受付開始であるが既に受入人数に達していたため、入ってくる車は係員によって返されていた。私たちは団体で事前登録していたためボランティアに参加できたが、ボランティアに行く場合は、事前に状況を問い合わせることが重要である。

ボランティアセンターで受付を行い、活動内容は避難所として利用されている益城町総合体育

館の清掃作業となった。



ボランティア団の集合写真

総合体育館までは南に約 2.5km、現地に着くとほとんどの駐車場にポリタンク等が置かれていた。車で避難生活している人が確保している場所のようである。体育館前の広場の舗装は凸凹に波打ちひび割れがひどかった。

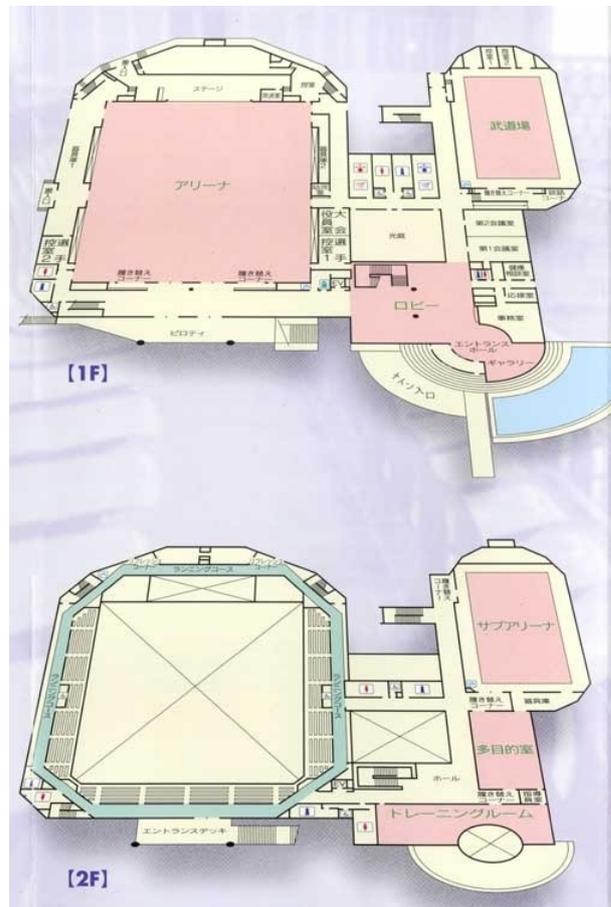


体育館前の広場の状況

総合体育館の避難所運営は YMCA (NPO 団体) に託されていた。この避難所には、最大で約 1,600 名の方が避難していて、現在でも約 780 名の方が生活していた。

最初に YMCA の職員の方から注意事項の説明があった。特に写真撮影に関しては、避難者の方が写らないように留意し、リーダーの方が作業状況のみ撮影を許可された。また、YMCA の一員としてロゴの入ったチョッキを着て活動するため、職員の方と間違い避難者から問い合わせがあった場合、トラブルの原因となるので曖昧な回答をしないよう注意があった。現にこれまでにトラブルが発生したようである。

その後、館内を案内していただいた。館内のアリーナや部屋は、管理室と子供の勉強部屋を除いて、すべて世帯毎に間仕切りされていた。1 階のアリーナの天井は剥がれ落ち、天井はシートで覆われていた。一世帯のスペースは 4 畳程度で、アリーナ内は段ボール箱の上に敷物をし、カーテン一枚で区切られていた。このスペースに入るのを拒む方は、未だに廊下に自分の住居スペースを作り生活していた。部屋がすべて住居スペースとして使用されているため、人が行き交う廊下の片隅に敷物をしマッサージを受けていた。プライベート空間の確保も難しく、いざ自分がここで生活するとなると何日くらい耐えられるだろうか。非常に過酷な環境である。



総合体育館の見取図（当館 HP より）

館内の説明を受けたあと作業に取りかかった。私の役割は、午前中は外の仮設トイレとシャワー室の掃除、午後は廊下のモップ掛けとゴミの片付けであった。掃除道具はすべて提供された。

仮設トイレの掃除には、ビニールエプロンとビ

ニール手袋を着用した。サウナに入っているように暑く、ビニールが腕にへばり付き、瞬く間に全身の汗が噴き出た。仮設トイレ内は熱がこもり、夏場の使用は過酷である。使用者が少ないせいか、意外にも清潔に保たれていた。



仮設トイレの清掃状況

トイレ掃除後、仮設シャワー室の掃除に移った。スポンジ等で壁や床の滑りを取り水で洗い流すと、据え付けが悪いのか、据え付け後の余震で傾いたのか、水が吐けずタオルを借りて床に溜まった水を取り除いた。

シャワー室は男女別に各 10 室設置しており、受付制で入浴時間が決まっていた。広さは 1 畳程度で手すりがなく、足腰の弱いご高齢の方の入浴は大変に思えた。



シャワー室の清掃状況

午後は、館内の廊下のモップ掛けとゴミの片付け等を行い 15 時過ぎに終了した。一端ボランティアセンターに帰り報告を行い、久留米のホテルへ帰った。

2 日目の夕食は、全員でホテルの前の居酒屋に

行き一日の労をねぎらった。



全員での夕食

#### 4. 現地視察と帰高(3日目)

朝 8 時にホテルを出発し、メディアを賑わしている熊本城の視察に向かった。道中、高速道路から見た熊本市内の周辺は、日本瓦の屋根がほとんど剥がれ落ち、ブルーシートで覆われた家屋が至る所に点在していた。高速道路自体には大きな損傷は見られなかった。



熊本市内周辺の瓦屋根の被災状況

熊本城に着くと、ほとんどが立入禁止になっていて、西側の二の丸広場から遠目にしか見ることができなかった。報道であったように、瓦が剥がれ落ち、至る所で石積みが崩れ散乱していた。



左：未申橋下の崩落状況 右：戌亥橋北側の崩落状況

また、西大手門の横の塀はすべて倒れ、石積み  
が崩落し、天守閣の瓦が剥がれ落ちていた。



西側から見た天守閣

熊本城を後にし、義援金を寄付するため益城町  
へ向かった。途中の道路沿いで、1 階の鉄筋コン  
クリートの柱が折れかけた状態の古いビルがあ  
った。1 階は壁が少なく、柱に力が集中し破壊し  
たものと思われる。



折れかけの鉄筋コンクリートの柱

益城町役場に近づくにつれ、道路は波打ち、周  
辺の木造住宅はほぼ全半壊していた。



県道 235 号：役場前の被災状況

益城町役場に 11 時に到着し、弘田団長より義  
援金を手渡した。庁舎は被災し修復中で、仮設の  
プレハブ庁舎で仕事をしていた。



修復中の益城町役場

役場周辺は被害が大きく、周辺の木造住宅は全  
壊状態であった。その中で、ごく最近建てられた  
家があり、屋根の一部こそ破損していたが、ほぼ  
原形のまま残っている。なにか異様な雰囲気であ  
った。(左の写真) 耐震化されていない古い木造  
住宅が、如何に地震動に弱いかに見て取れる状況  
である。



役場西側(左) 役場南側(右)の被災状況

11 時半に益城町役場を後にし、現地視察をしな  
がら帰省についた。フェリーの時間も迫っていた  
ため、車中から視察することとした。

益城町役場の南を横断している県道 28 号に入  
ると、一段と被害が大きく、電柱は傾き、橋は横  
に 50cm ほどズレていた。比較的新しい家でも全  
半壊状態で、未だに手つかずの状態に残っている。  
家屋の倒壊で亡くなられたのか、瓦礫の上に花が  
手向けられていて胸を打つものがあった。道路の  
うねりはひどく、復旧工事も重なりひどい渋滞が  
発生していた。県道 443 号に入ると、住宅のブロ  
ック積み擁壁が崩れ、土嚢とブルーシートで応急  
処置をしていた。



県道 28 号沿いの被災状況

## 5. おわりに

被災地を見て感じたことは、建物の耐震化が進んでいればこんな大きな被害にはならなかったと思われる。東北の津波被災に比べ死者こそ少ないが、多くの方々が建物の倒壊により家を失い、今後、長期にわたって避難所や仮設住宅等での生活を強いられる。避難所生活は想像を絶する苦痛があり耐えがたいものがある。高知県においては、南海大地震の発生確率が高く、東日本大震災を教訓に様々な対策が講じられ、特に津波浸水区域内に住まわれている方々の防災意識は非常に高まっている。反面、住宅の耐震化率は全国平均を下回っている状況にあり、全体的に見ればまだまだ防災意識の低さを感じる。熊本地震の発生後、住宅の耐震化が加速しており、この教訓をもとに減災に繋がることを期待する。

東日本大震災のボランティアに続き、今回も非常に貴重な経験をさせていただいた。ボランティア団を派遣してくれた会社と、避難所のボランティアでお世話になった YMCA の職員の方に感謝を申し上げます。今後、この経験を少しでも仕事に活かしていきたいと思う。

最後に、地震によりお亡くなりになった方のご冥福と、被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

2016 年 6 月 17 日



県道 443 号：被災前（左 Google より）被災後（右）

益城町を出て、阿蘇を眺望する絶景の草原道路（阿蘇ミルクロード）を通過して別府へ向かった。別府でお土産を買い、行きと逆のルートで帰省し、22 時過ぎに全員無事に会社に到着した。

# 熊本地震災害のボランティア活動と現地視察（2016年6月）

空間情報課 大利 飛鳥

## I. 目的

平成28年6月5日から7日まで、熊本地震の復旧・復興の手助けを通じ人間力・団結力を高めると共に、熊本市内の被災状況を視察し今後の南海トラフ地震等の震災業務に役立てるためボランティアに参加しました。

## II. 1日目（本社から久留米市内へ）

朝9時、本社研修室にて出発式を行いました。右城社長から激励の言葉を頂き、弘田部長の掛声を合図に全員で「エイ・エイ・オー！」と士気を高めました。お見送りに来て下さった方々に手を振り車5台で本社を出発しました。宿泊先の久留米に到着したのは夕方の18時頃でした。



出発式

この日の夕食は、ご当地の豚骨ラーメンです。細麺ながらもしっかりとしたコシがありとても美味しかったです。それともう一品、ピリ辛ダルム焼も注文し、久留米のグルメを堪能しました。



らーめん道(左)とピリ辛ダルム焼(右)

## III. 2日目（災害ボランティア）

ホテルを7時に出発、目的地の益城町災害ボランティアセンターへ向かいました。



災害ボランティア受付所

到着後、受付を済ませ益城町総合体育館へ移動しました。最初にボランティアの内容や施設の状況の説明がありました。この施設には現在およそ800名の被災者の方が生活しており災害直後は倍近くの方が避難されていたそうです。



ボランティア前集合写真(上)と益城町総合体育館(下)



作業内容は屋内外のトイレ・更衣室・フロアの掃除及び屋内外のゴミ収集でした。作業中、被災者の方から「キレイにしてくれてありがとう」と何度も声をかけていただきました。お昼休憩までにすごく汗をかき、夕方まで体が動くか心配になりました。15時半には作業も終わりボランティアセンターへ戻りました。



ボランティア作業

その後、作業終了の手続きを済ませ久留米のホテルに帰りました。建物調査グループの3人と合流し、夕食は全員でお疲れ会をしました。



慰労会の様子

#### IV. 3日目（現地視察・帰省）

朝一番に訪れたのは壊滅的な被害を受けた熊本城です。テレビ中継でよく目にする映像の石垣や櫓やぐらと門、51箇所箇所で崩壊しており立ち入り禁止区域も多く目につきました。修復には10年以上を要するとのことでした。



崩壊した熊本城

午前11時、益城町役場へ向かいました。ここでは、会社と社員から集めた義捐金を渡すことが出来ました。あとは高知へ帰るだけとなりました。



益城町役場(左)と義捐金受け渡し(右)

益城町役場付近の被災箇所を通り抜け、阿蘇外輪山を周回する絶景スカイライン通称ミルクロードから阿蘇山を眺望しつつ、大観峰で記念写真を撮ることが出来ました。



益城町の様子(左)と大観峰(右)

#### V. 最後に

今回、被災現場の視察とボランティア活動を通じて、被災者の方々と触れ合えたことはとても貴重な体験になりました。いつ起きてもおかしくない南海トラフ地震に、自分たちの熊本地震災害ボランティアの経験を生かし、業務や私生活に役立てたいと思います。

そして、今回参加させて頂きありがとうございました。